



エッセイ
シベリアの石油の町 ストレジェボイ
松村 眞

発行日
2010.6.30

もう3月だというのに、モスクワ郊外のビコボ空港はひどく冷たい夜のとばりに包まれていた。国内線専用のこのローカル空港は、華やかな国際線の空港と違って照明が暗く、人は多いのに売店もレストランも見当たらない。発着を告げるボードが故障しているのか、フライトの時刻が数時間もずれている。われわれが乗るシベリア行きの深夜便は、まだ案内の掲示がない。ひどく尊大な態度の女性係官に聞いて、どうやら間違いなく飛ぶことを確認し、その後はただひたすら待つ。熱いコーヒーが飲みたいのだが、コーヒーショップはもちろんのこと、日本ならどこにでもある自動販売機もない。やっと予定の飛行機が着いて準備が整い、ぞろぞろとターミナルから飛行機に向かって歩く。風が冷たくて耳が痛い。ちらつく小雪が襟もとで小さなしずくになる。マフラーで顔をおおい、たてたコートの襟を片手で押さえながら、後尾のタラップから機内に入り込む。この飛行機は120人乗りのイリュージンで、座席は指定ではなく先着順である。われわれの順番はかなり早い方だったので、窓際の席を取ることもできたのだが、あえて通路側にした。窓から眼下に広がるシベリアの大地を見てみたかったのだが、窓側はうっかりするとひどく寒いのと、満席だとトイレにも行けないからである。

予想どおり機内は、大柄の上に分厚いコートで着膨れしたロシア人の乗客で満席になった。手荷物とコートで手足も動かさない。だいぶ遅れてやっと離陸した飛行機は、途中で給油のためウファに1時間ほど着陸し、6時間の後に小さな石油の町ストレジェボイに着いた。このフライトの機内サービスは、コップ一杯の炭酸水だけで食事もスナックもでなかった。座席の横にも後にもテーブルがないところを見ると、国内線は食事のサービスがないのであろう。機内で一度だけトイレに行ったが便座がない。それに日本では考えられないほど汚れがひどく、とても用を足す気がしない。とく観察してみると、ロシア人の乗客も数時間のあいだ、ほとんどトイレに行かずにじっとしている。状況をよく知っているのであろう。そこで次から飛行機に乗る前は、なるべく水分を口にしないように気をつけることにした。

われわれが訪れたストレジェボイは、油田が発見されてできた人口4万5千人の小さな町である。モスクワから東に約3000キロ離れたオビ川の沿岸にあり、郊外には多くの油井がある。数十から数百の油井で採掘された原油は集積センターに集められ、50%以上も含まれる水分を除去してからパイプラインで送り出される。西シベリアにはこうした油田の町が数多く散在しており、これらの点と点の間を人は飛行機で、貨物はトラックで、石

油はパイプラインで運ばれている。ストレージェボイは、ロシアで最大といわれるチュメニ油田の一画にあるのだが、地理的には東の端の方に離れている。このため行政区分はチュメニではなく、トムスク州に属している。州都トムスクは 30 万都市で大学もあるが、ここからは約 1000 キロも離れているので、ちょっと町まで遊びに行くというわけにはいかない。

われわれがストレージェボイに来たのは、原油の採掘現場における環境影響を確認するため、モスクワの石油行政機関がこの町を紹介し、ホテルを予約してくれた。まずは空港からチャーターしたバスで町に入る。あたりは一面の雪と氷の世界で、町から少し離れたところには針葉樹の黒い林が散在している。滞在中に気がついたのだが、このあたりに山や丘はなく、全くの平地といってよい。空はどんよりと曇っていて、この季節、青空は全く見られない。だから色彩に乏しく、モノクロの世界のようだ。やがてバスは、この町ではかなり高級と言われるホテルについた。4 階建てで地下が倉庫、1 階がロビーとダイニングルーム、2 階と 3 階が客室になっていて、40 人ぐらいは泊まれそうである。二重になっている重い木の扉を押し開けてロビーに入ると、さすがに中は温かい。しかし、防寒のためか窓が小さく、そのために内部はかなり暗い。このホテルは四角い建物なので、2 階と 3 階は真ん中がホールになっており、その周囲に客室が配置されている。

私の部屋は入り口の右側がバスとトイレ、左側は洋服掛けになっていて、奥が 10 畳ぐらいの寝室になっていた。寝室には左右の壁に接して二つのベッドが置かれており、その間に小さなテーブルと椅子があった。外の気温は零度以下なのに部屋は暖かく、たぶん 20 度以上あったと思う。しかし部屋全体は暖かいのに、一部に冷たい風が入ってくる。よく点検すると、二重になっている窓の外側のガラスが大きく割れていて、外気が立て付けの悪い内側の窓のすきまから入ってくるのだ。このままでは夜中に寒さで眠りを妨げられるに違いない。そこで、こんなこともあろうかと思って持参したガムテープで、ガラスの割れ目をふさぐことにした。しかしやってみると、ガムテープがすぐにはがれて、くるくると巻いてしまう。一瞬だめかなと諦めかけたが、うまくつかないのは温度が低く、接着力が低下しているからではないかと気がついた。そこで今度はガムテープの上を手のひらでしばらく抑え、体温で温めるようにしたらはがれなくなった。

次にトイレを使おうとしたら、ここも便座がない。それに水を流したら、いつまでも水が止まらない。ブロータンクのふたを開けて調べてみたら、フロートが上がって水を止めるようになっている突起が錆びついている。そこで、やむなく毎回手で水を止めることにした。トイレの次はバスである。バスといっても、足のついたバスタブがごろんと置いてあるだけなのだが、今度は栓がない。それに不潔とは思わないがかなり汚い。水が悪いのだろうが、水垢がバスタブに黒くこびりついている。そんなわけで、結局、ここに滞在す

る3日間はバスを諦めることにした。なお、テレビはあったが映らないし、ラジオはガーガーというだけで、音声にならなかった。サービス業といえども、競争原理にもとづくインセンティブがないと、こういう結果になるということがよく解った気がする。もちろん個人の家庭では、ホテルや飛行機のような公共施設よりずっと手入れが行き届いているはずである。これは後から聞いた話だが、バスの栓はバスタブの数しか作らず、トイレの便座はトイレの数しか作らないそうだ。理屈からいえば同じ数しか必要ないからだそうだが、便座は壊れるし、バスの栓だって長い間には硬くなって使えなくなる。でも本来が同じ数しかないのだから、新たに必要になった人はやむなく公共の施設から失敬するらしい。計画経済の硬直性が原因だろうが、われわれには予想もしない事態が起きるものだと思った。

ホテルに着いた次の日、われわれはバスで油井と原油の集積センターを見に行った。新たな油井をボーリングしているサイトでは、零下30度の寒気の中で作業員が働いていた。彼らはトレーラーで寝泊まりしながら、夜間も交替で戸外の掘削マシンを操作していた。われわれがなにげなく使う灯油やガソリンの生産に、こうした厳しい労働がともなっていることを思い知らされた気がする。油井の次には集積センターを案内されたが、歩きながら施設を見学するのが非常に寒い。厚いズボン下を2枚重ねているのに、足元からじわーと寒気が上がってくる。風が少し吹くだけで耳がちぎれそうで、案内してくれる係官には申し訳ないが、多少見落としてもいいから早く終わりにして欲しいと思った。寒いとは聞いていたし覚悟もしてきた。毛皮の帽子と長くて重いコート、それに深くて厚いブーツで完全武装してきたのだが、さすがに零下30度の寒気は厳しい。よくまあこんなところに人々が住んで働いているものだと感心した。

次にホテルのまわりのシベリアの人々の生活を紹介します。まず住宅だが、すべてが5階から10階建ての集合住宅で、日本の公団アパートによく似ている。ベランダには、これも日本と同じように洗濯物が干してある。零下30度では乾く前に凍りついてしまいそうに思うのだが、聞いてみるとよく乾いて気持ちがいそう。ベランダに食料品を吊るしている家が多い。それもポリ袋に包んだ大きな肉の塊をよく見かけた。天然の冷蔵庫というわけである。なお、集合住宅にはすべて地域熱供給のサービスがある。暖房費用は占有面積に応じて負担するようになっているのだが、ほとんど無料に近い値段のようだ。ちなみにシベリアの人たちの収入は、寒冷地という理由でモスクワの10倍程度に設定されている。だからロシアでは豊かな階層に属しているのだが、お金があっても物がない。ホテルのそばのコンビニみたいな食料品店に入ってみたが、売っていたのはパンと小麦粉、それに赤っぽいジュースだけで、陳列棚はガラガラだった。それでもレジには太ったおばさんが一日中ニコリともしないで座っていて、商品を売っているというよりも盗られないように番をしている感じだった。面白いことに、戸外でアイスクリームを売っていた。あまり安くはなかったが、まとめて3個、5個と買っていく人がいた。売る方も買う方も極

寒に耐えながらの商売にいささか呆れたが、きっと家の中はアイスクリームを食べたいほど暖かいに違いない。寒冷地で娯楽施設が乏しいことから、多くの人が毎日6時間以上もテレビを見ているとのことだった。

多少脱線するが、ロシアの若い女性にはきれいな人が多い。細身でスタイルがよく、色がぬけるように白くて頬だけが薄いピンク色に染まっている。しかも結構おしゃれで、顔の化粧はもちろんのこと、どこで手に入れるのかしゃれたイヤリングやブローチも身につけている。町や店では思わず見とれてしまうような美人をよくみた。こうした女性が年をとると、どうしてあの一様に太ったおばさんに変身するのか理解に苦しむ。それから子供も見とれるほどかわいく、まるで本物の人形のようなのだ。

ところでシベリアの人たちが渴望しているのは野菜である。そのため、この町では大きな温室でトマトやキュウリを栽培していた。温室の中は夏のように暖かく、20度以上に維持されていた。ガラス1枚の外側が零下30度で内側がプラス20度だから、この温室はものすごくエネルギーを消費しているのに違いない。モスクワにも数ヘクタールの広大な温室があり、やはり野菜を作っている。もちろんかなりのエネルギーが必要だが、この国はエネルギーが豊富なので湯水のように使っているように見える。ガソリンは1リットルが2円ぐらいで、収入に対してひどく安い。モスクワの地下鉄は最近になって10倍に値上げしたが、それでも1円ぐらいである。要するにエネルギーと家賃、それに公共交通費がメチャクチャに安く抑えられてきたのである。一方、民生用や家庭用の消費財が非常に少なく、運よく手に入っても値段が高い。この価格体系が自由化によって国際的な水準に移行するには、かなりの時間が必要であろう。

シベリアからモスクワに戻って街を見物した。日本から零下5度のモスクワに着いた時は寒いと思ったのに、シベリアから戻った時はずいぶん暖かく感じた。短時間なら毛皮の帽子や手袋がなくても外を歩けるのが嬉しい。スターリンの時代に囚人労働で造られた地下鉄に乗り、モスクワの繁華街を歩いて休日を楽しんだ。地下鉄は防空壕を兼ねて地下深くに建設されており、地上と地下駅は長いエスカレーターで結ばれている。エスカレーターの速度は非常に早く、乗り降りに最初はちょっと戸惑う。老人でも大丈夫なのだろうか。地下の駅舎は天井が高く、駅によっては壁だけでなく、天井にまで美術館にあるような絵が描かれている。壁や階段の手すりには大理石が無造作に使われており、その贅沢さにいささか驚く。この地下鉄は費用を無視して造られたのであろう。電車は1分間隔でひっきりなしに走っているが、減多に遅延トラブルがないというからたいしたものである。地下鉄を降りて今度はモスクワの原宿といわれるアルバータ通りを歩く。両側には旅行者にお土産を売る小さな店がずらりと並んでいる。売っているのは、マトリョーシカと呼ばれる木製の人形が圧倒的に多い。絵画や食器も多いが、小さなバッジの類や共産党の記章、そ

れに軍の帽子なども売っていた。私はモスクワの風景を描いた水彩画 2 枚とバラライカを買ったが、金を払う時に問題が生じた。手持ちのドルで買おうとしたのだが、警官に見つかりと面倒なことになるらしい。そこで金を直接手渡さずに、一旦、そばのマトリョーシカ人形にそっと入れる。すると売り手はタイミングをはずして金額を確認し、それから品物をくれる段取りになっていた。

このアルバータ通りに沿った建物もそうだが、モスクワの建築物は、一般的に古いけれどもそれぞれに芸術的な装飾が施されている。美術館のような外観のデパートがあったり、貴族の豪邸のようなアパートがあったりする。そのなかでもボリショイ劇場の豪華さや、クレムリンの美術品には圧倒される思いがした。街で見るモスクワの人々には活気があり、自由市場には肉や果物があふれ、まるでアメ横のように混雑していた。モスクワ大学前の広場では、結婚パーティーを終えたばかりの人達が集まって陽気に騒いでいた。この国には物が無いのでも作れないのでもない。国営の商店に品物がなくても、人々は所属する企業体から多くの生活物資を手に入れている。また、統計に現れない闇の経済が発達していて、人々は大きな経済の混乱の中にあってもしたたかに生きている。短い期間だったが、ロシアの広大さと人々のたくましさを目の当たりに見せられ興味ある滞在だった。

(追記) この旅行記は、1992 年の 3 月に現地を訪問し、帰国直後に執筆した原稿である。ソ連が崩壊したのが 1991 年だから、当時はルーブルの価値が大幅に下落した混乱期だった。しかし現在は経済が回復しているので、当時のモノ不足は解消しているであろう。

(おわり)